

桜といえは入学式のイメージであったが最近では温暖化の影響か卒業式に変わってきた。南九州から北海道渡島半島まで約一カ月間かけて春の訪れとともに桜前線が北上し日本列島を穢れない純潔な桜色に染めて行く。

現在我々が目にする多くの桜はソメイヨシノであるが他に山桜、八重桜、しだれ桜等、自生・園芸種を合わせると約600種類もある。ソメイヨシノは、江戸時代末期江戸の染井村の植木職人達によってエドヒガン桜とオオシマ桜の交配で生まれた園芸種である。桜の名所である吉野山の山桜と混同される恐れがあるため、染井吉野と命名したという。

花が先に咲き葉が後から出る、花付きがよく豪華である、成長が早く10年も経てば花を付けるなどの長所があり明治以降学校や公園の植樹として、また堤防などの街路樹として、全国に急速に普及した。ソメイヨシノは種子で発芽することがなく挿し木で繁殖させるため個体差がなく、すべてのソメイヨシノは一本の原木と同じDNAを

持っている。このため同じ地域の桜は斉一に開花し満開になりそして散って行き、見事な桜前線が構成される。

桜の花の歌を二首。平安時代末期武門の家に生まれながら京都西山の勝持寺で出家した西行法師作「願わくは花のしたにて 春死なん そのきざらぎの 望月の頃」。

江戸時代の国学者・本居宣長61歳自画自賛像に賛として書かれている、また神風特別攻撃隊の部隊名の元となったとも言われる「しき嶋の やまとごころを 人とはば 朝日ににほふ 山ざくら花」。

解釈はお任せするとして、何れも山桜ではあるが、豪華絢爛たる桜の花が春のそよ風に一夜にして散り行く様を雅と感じ、もの悲しくも潔しとも思う日本民族の魂の源流を歌っているのではなからうか。

一方桜前線は、花より団子、桜の花の下に集い酒を飲み交わし、仲間との絆を確かめさらに深める微笑ましくも賑やかな歳時記「お花見」を連れてくる。もののふにとつては、花びらをひとひら酒に浮かべ一人静かに杯を重ねるのもまた一興である。よきかな酒よきかな桜花。